

## 夏休み



「ママ、夏休みに鹿児島に行けるようになったら」

四国にいる娘から電話があつたのは、八月七日のことである。夏休みには、一週間ほど婿さんの運転するワゴン車で、一家揃つてわが家に来るのが習わしになっている。三年前までは東京だったが、一昨年からは鹿児島のこの小さな町に来ている。

今年は長男が中三で、受験のための講習があり、中学の音楽の優秀な教師の婿さんは、例年吹奏楽のコンクールで香川県代表になるので、そのための日程とを勘案すると、一泊しか出来ないという香川から鹿児島までのドライブとなるとトンボ帰りでは、ただ婿さんが疲れるだけだろうから、今

年は諦めなさいと娘に言つておいたのだ。

ところが何と、県選抜のコンクールで演奏時間が、規定を十一秒オーバーしてしまつて珍しくも失格になり、代表の座を明け渡す羽目になつたのだとのことである。それで長男は勉強があつて来れないが、次男坊と一緒に三泊は出来ると言う。

「よかつたね。婿さんには悪いけど」

毎日の酷暑にげんなりして、ただただ耐えていた私だが、とたんに活気が戻つて来た。彼らにとっては三度目の鹿児島である。一年目は、市内の観光と入来近辺の温泉巡りで終わった。去年は、婿さんの母親も一緒に見えて、わが家の次男坊夫婦が孫二人連れて来た上、末娘も加わつての大人数となった。全て子供たち中心で、海へ行つたり、庭でバベキューをしたりの大騒ぎのうちに終わってしまった。今年は、私も少しは鹿児島に詳しくなつたこととて、あちこち案内しようと思つていた。

十二日夜高松を発ち、十三日の朝には着くとのことである。昨年はフェリーで大分まで来て十号

線、宮崎から高速道路と通つて来たのだが、人吉からの加久藤トンネルが開通したので、今年は陸路福岡に出て高速に乗るという。

十三日は九時半頃到着した。オフホワイトの大きなワゴン車である。

「やあ、よく来たな。すごい車じゃないか」夫はサンダルをつっかけ裏庭に出て、婿さんの車を覗いている。去年までの紺色のハイエースを買換えたとのこと。GM製の高級ワゴン車である。窓枠や天井の枠はウツドのピカピカで、テレビも運転席と後部座席用に二つも付いている。ソファは柔らかい革張りでひじ掛けもゆつたりして応接セットと言った感じである。車好きの婿さん、きつと何年もお小遣いはローンに消えることだろう。

途中休み休み来たとは言え、十三時間のドライブで、先ずは一寝入りしてもらおう。昼食後、明日は台風接近ということで何処へも行けないだろうから、今日のうちに串木野のゴールドパークに行こうと提案した。私は友達と行って面白かったが、夫はまだ行つたことがない。私と夫はグレーの

革のソファに座つて、テレビの高校野球を見ながら、道順はおらかな婿さんの運転に任せて串木野へ向かう。娘は助手席、次男坊の憲ちゃん是最後部のベッドに寝ころんで観戦している。

ゴールドパークは、現在も生産している三井の金山の坑道を利用した設備で、金鉱採掘の実際を知ることが出来る。地下何百メートルもまるで蟻の巣さながらに掘り進んだ迫力ある採掘機の実物もある。流石に現代では一人で操れるよう機械化されている。

併設の夏休みのための恐竜展も見て帰路について。その後お墓参りも済ませたが、その頃は雨が降り出し、いよいよ台風の襲来である。夕食後は、雨戸を立てた。

夜中の二時頃、風の音が激しくなった。電気は停電したり、点いたりを一時間ほど繰り返した後、本格的に停電になった。風の唸りは益々激しく、木々は悲鳴を上げている。雨戸を閉めているので、真つ暗闇である。

朝八時頃、どうやら少し納まつたらしいので、

雨戸を開けると、孟宗竹は十本ほど倒れきれいな花を付けていたさるすべりが根元から折れている。柿の実も葉もひきちぎられて散乱して、植木も何本か傾いている。四国からの面々には初めての体験であった。

停電は夕方まで続き、観念した婿さん家族に私も加わって麻雀大会となった。娘は初めてなので、説明したり待たされたりで時間が掛かかり、私は肩が凝ってしまった。

翌日は多少の雲があるものの晴れ上がったので、計画どおり、知覧、池田湖へと出発した。

武家屋敷群をちらりと見て、特攻会館に入った。私は前回来たときは、涙でぐしゃぐしゃになって嗚咽をこらえるのに必死だったが今回は目頭を押さえる程度に抑制出来た。母の身として、その年齢を見ただけで胸を衝かれ、無垢なその心根が余りにも痛ましかつたのだ。孫もそれなりに感じる事があつたのだらう、小遣いを叩いて何冊も資料を買っていた。

ラーメンの昼食後、指宿スカイラインを池田湖

に向かう。左下に広がる錦江湾も美しかったし、目前に開闢岳がほんのりと優美な姿を現したときは、皆声をあげた。池田湖も広々と明るく、開闢を覗かせて素晴らしかった長崎鼻にまで足を延ばしたかったが、来年の楽しみとすることにして、若者向きの焼肉バイキングを食べようと、入来城山ゴルフクラブへと登った。

柔らかな芝生の縁、点在する樹々の影を写す池、なだらかな山稜と絶景を眺めながらの焼肉は、味もまた一味違う。お兄ちゃんが居れば喜ぶだろうと話しながらゆったりと飲み食べ、すっかり満喫したのだった。

十六日、帰省ラッシュの始まらないうちに、娘の一家は朝食後直ちに出発した。短い間ではあったが、初体験を堪能したことだろう。

「お兄ちゃんが高校入学の暁には、おじいちゃんが今回のコースは連れて行ってあげるよ」との約束をお土産にして。

(平成8年8月)